



第65回日本臨床眼科学会モーニングクルズス8

# アレルギー性 結膜疾患 診療のいろは

2011年

10/10 (月)

7:45 - 8:45

東京国際フォーラム  
第9会場 (G701)

診療

アレルギー性結膜疾患  
診断のいろは

日本医科大学眼科 教授 **高橋 浩**先生

座長

日本大学医学部視覚科学系  
眼科学分野 臨床教授

**庄司 純**先生

検査

眼アレルギー検査のいろは

高知大学医学部眼科 教授 **福島 敦樹**先生

治療

症例で学ぶ免疫抑制点眼薬  
使用法のいろは

**高橋 浩**先生、**福島 敦樹**先生、**庄司 純**先生

共催: 第65回日本臨床眼科学会 / わかもと製薬株式会社

# アレルギー性 結膜疾患 診療のいろは

座長



略歴

1985年 日本大学医学部 卒業  
1989年 日本大学医学部大学院  
外科系眼科学 卒業  
1990年 鎌子市立総合病院 眼科医長  
2002年 日本大学医学部 兼任講師  
2004年 庄司眼科医医院 院長  
2007年 日本大学医学部視覚科学系  
眼科学分野 臨床教授

日本大学医学部  
視覚科学系眼科学分野 臨床教授

庄司 純 先生

アレルギー性結膜疾患は、日常診療での遭遇頻度が高い、ポピュラーな前眼部疾患です。しかし、アレルギー性結膜疾患の発症背景には、遺伝的素因(アトピー素因)、原因抗原、生活環境など多因子が関与することから、個々の症例における臨床症状は多彩で、急性増悪および難治化例もみられます。したがって、アレルギー性結膜疾患の診療において我々に求められることは、正確に診断し、病状に合わせて適切な治療法を選択することにあります。

今回のクルズスのテーマは、①臨床所見から、正確に診断および合併症診断をする、②眼アレルギー検査の使用法、判定法を学ぶ、③診断および検査結果から適切な薬物使用法について検討する、の3点です。

今回は、アレルギー性結膜疾患のスペシャリストであります高橋教授と福島教授に、今回のテーマについて解説していただき、皆様と一緒にもう一度アレルギー性結膜疾患診療を見直してみたいと思います。アレルギー性結膜疾患診療のいろはが、会場の皆様と共有できましたら幸いです。

日本医科大学眼科  
教授

高橋 浩 先生



略歴

1983年 日本医科大学卒業  
同 年 日本医科大学麻酔科入局  
1986年 日本医科大学眼科入局  
1989年 山形県北村山公立病院眼科  
医長  
1990年 日本医科大学眼科助手  
1994年 Harvard大学Schepens眼研  
究所留学  
1996年 日本医科大学眼科講師  
2000年 同助教授  
2004年 同教授

アレルギー性結膜疾患は眼科の日常臨床で最も頻度の高い疾患の一つです。小児から老人まで年齢層を問わず多くの患者さんがやってきます。忙しい外来で診断に迷っているヒマはありませんから、エンピリック(経験論的)治療で対処します。普通の季節性アレルギー性結膜炎(花粉症)であれば、迷うこともあまりないでしょう。しかし、アレルギーなのか感染症なのか判然としない症例ではどうでしょうか。あるいは、治療の効果が芳しくなく、ステロイドを長期に使用しなくてはならないような重症例に遭

遇したらどうでしょうか。果たして自分の診断は正しいのか、鑑別すべき疾患は何か、治療方針は適正か、などをもう一度見直す必要を感じるのではないのでしょうか。今回は、アレルギー性結膜疾患診療ガイドラインを参照しながら、もう一度「診断のいろは」を見直してみたいと思います。

高知大学医学部眼科  
教授

福島 敦樹 先生



略歴

1990年 高知医科大学卒業  
1993年 米国国立眼研究所免疫学  
部門 留学  
1996年 高知医科大学眼科学 助手  
2000年 ジョージア医科大学分子医学  
遺伝学研究所 留学  
2004年 高知大学医学部眼科 助教授  
(准教授)  
2008年 高知大学医学部眼科 教授

アレルギー性結膜疾患は「I型アレルギーが関与する結膜の炎症性疾患で何らかの自他覚症状をともなうもの」と定義されています。すなわち診断には、結膜あるいは全身においてI型アレルギーが存在することを証明する必要があります。近年、アレルギー検査は進歩しており、アレルギー性結膜疾患全般の診断に役に立つものから、春季カタルなどの重症例における病勢の把握に役に立つものまで登場してまいりました。本講演では我々が通常の診療で利用できる涙液総IgE測定キット、庄司先生のグループが開

発された涙液中 Eosinophil Cationic Protein(ECP)測定、そして我々が現在考案している結膜充血定量ソフトについて基本事項をお話しさせていただきます。そして、これらの検査ツールが実際の症例で、診断・治療にどのように役に立つのかを考えてみたいと思います。